

大賞

「ほてばき」

竹田行人

親子はフクザツでややこしくて愛おしい。

松本「ダンボール」

熊本は東京、大阪、名古屋などの大都市圏を

栞「ルパン」

除くと最も渋滞が多い都市であるそうなの。

松本「ンジャメナ」

栞（17）が空港に向かうために乗ったタク

栞「ナン」

シーも例外なく渋滞に巻き込まれている。

松本「ンゴロンゴロ保全地域」

タクシーを運転する松本（45）は8年前に

栞「キリン」

離婚したきり会っていなかった栞の父親。

松本「おいおいおい待って待って待って。シリオリ。栞。このゲームのルールは無視か？」

栞の母が再婚したことをきっかけに、栞は

シリオリクラッシャーか？」

家族とともに海外に移住することになる。

栞「そんなことより松本さん」

栞の母と新しい父親はまだ学校のあつた栞

松本「お父さん。だろ」

を置いてひと足先に東京観光に向かっている。

栞「8年ほつといたのに？」

それはもう簡単に会えなくなる栞と松本を

松本「いや。それは。それは。その」

2人きりにするために栞の母が考えたこと。

栞「この8年で私。修学旅行3回行ったよ。広島と京都と東京」

栞（17）高校生

松本は栞に餞別を渡す。餞別は「ほてばき」。

松本「楽しかったか」

松本（45）タクシー運転手

「ほてばき」。見たことも聞いたこともない。

栞「楽しかった」。夜通し好きな男子の話で盛り上がった」

客

「ほてばき」とは何か？ 「ほて」と「ばき」の2

つで1つ。カラーが豊富。すぐく伸びる。なん

だ？ わからない「ほてばき」。

だ？ わからない「ほてばき」。

り上がった」

松本「葉。そういうヤツがいるのか。クマタカか？ クマコウか？ 答えによっちゃ」

葉「その間ずーっとほったらかし」

松本「それは。いや。その」

葉「なに？」

松本「いや。あれだよ。それは」

葉「あれって？」

松本「いやー。それはー。そのー」

葉「もういい。てか車。さつきから全然動いて

ないけど。飛行機間に合うの？」

松本「大丈夫だ。こっちはプロだぞ。言うだろう

阿蘇と渋滞は肥後の華って」

葉「言わないよね」

松本「言わない。言わないけれども」

葉「あのさ。松本さん」

松本「お父さん」

葉「松本さん。もうこの際だから聞いときたい

んだけどさ」

松本「あー。成田で待ってんだろ。お母さんと

あいつ。あの。ペロ」

葉「テオ。ね。うん。さつき浅草寺にお参りして。これから空港行くって言った」

松本「どうだ。オランダ人のパパは。あれだ

ろ？ ベランダでチューリップ育てたり。

カステラ買ってきたりするんだろ？」

葉「それ。オランダっていうよりも長崎のイ

メージだよ」

クラクション。

クラクション。

葉「前。動いたよ」

松本「お。お」

葉「てゆーか。なんかおかしいなーって思って

たんだよね。ずーっと」

松本「なにが？」

葉「なんでお母さん。先にパパと東京観光とか

行くことにしたのかなーって」

松本「そりやお母さんも最後に観光しときた

いって思ったんだらうよ。今まで仕事ば

つかでそういうことできなかったから」

葉「私置いて？」

松本「葉は学校あるだろ？」

葉「このためだよ」

松本「さー。なんのー。ことだかー。なー」

葉「松本さんと2人にしたかったんだよね。私

を。そうでしょ？」

松本「偶然だろ。偶然お母さんが呼んでたタク

シーの運転手が実の父親だったっていう

そういう。なんていうか。キセキ？」

葉「じゃないよね」

松本「じゃない。じゃないけれども」

タクシー無線のノイズ。

タクシー無線のノイズ。

葉「いいトコだよ。オランダ」

松本「行ったのか？」

葉「春休みにパパと。家みてきた。海外ドラマ

みたいな家でき。まあ海外なんだけど。あ

そこで暮らすとか昂るわーって感じ」

松本「そうか。よかったな」

栞「たぶんもう日本には戻ってこない。だから
お母さん最後に松本さんと私をつて」

松本「お母さんは悪くないからな」

栞「わかつてる。てか私も最後だから聞くけど。」

松本さんなんでお母さんと」

松本「あー！ あー！ あー！」

栞「うるさいなーもー。なに？」

松本「そうだった。あれ。餞別。買つといた。こ
れ。ほら。これ」

栞「あー。ありがと。え？ これ」

松本「え？ ダメだったか？」

栞「いや。ダメとかダメじゃないとかじゃなく
て。なに？ これ」

松本「なにつて。あれだよ。ほてばき」

栞「え？」

松本「ほてばき」

栞「え？」

松本「ほてばき」

栞「え？」

松本「え？ なに？ 突如として運転席と後

部座席の間で時空歪んだの？ こんなに
伝わらないもの？ ほてばき」

栞「ほ。ほて」

松本「ばき」

栞「なにそれ」

松本「なにそれつて。いま栞が持つてるやつだ
よ。ほてばき」

栞「えー。なんでほてばきつて言つといてそん
な少年みたいな瞳で娘を見つめられる
の？ てか。ほてばきつてなに？」

松本「袋ん中に2つ入ってるだろ。四角い方が
ほてで、丸い方がばき」

栞「へー。ほてとばきに分かれるんだ。じゃあ。
こうしたらばきほて？」

松本「栞。それはダメだ。戦争になる」

栞「は？ なにそれ？ そんなわけないじゃん
え。なにこれ。めっちゃ伸びるけど」

松本「そりゃそうだよ。だつてそれがほてばき
だもん」

栞「うわ。そのドヤ顔なんかうざい。感触。グミ

とガムの中間みたいだけど」

松本「確かにな。ちよつと食つてみるか？」

栞「食べ物なの？ まーでもそう言われれば
確かにちよつと美味しそう」

松本「おいおいおいおいバカバカバカバカ！
ホントに食うなよ！ 死ぬぞ！」

栞「えー。全然わかんない。その感じマジで死
ぬ感じのヤツじゃん。え？ なんなの？
なんなの？ ほてばき」

松本「ホントに知らないのか」

栞「うん。初めて見たし。聞いた」

松本「はー。ジエネレーションギャップもここ
までくると爽快だな」

栞「そういうものなの？ ほてばきつて」

松本「確かに一番獲れたのは昭和の中頃で、
今はもうあんまり獲れなくなつたつてS
NSのトレンドで見かけたな」

栞「漁で獲つたりするものなの？ てかトレ
ンドになつたの？ ほてばきが？」

松本「よし。ここでほてばき豆知識。ほてばき

はハマグリ貝殻みたいに2つで1つだ。

たのになあ

ウインカー。

組み合わせは世界に1個しかない

葉「絶対聞く相手間違ってるよそれ。てかさ。

葉「2つで1つ。てか。貝の仲間なんだ」

これ。どこで買ったの？」

葉「してたよね。お母さん。浮気。あの頃」

松本「ちがう」

松本「ん？ 天草」

松本「カナコが。そう言ったのか？」

葉「違うんだ」

葉「天草かあ」

葉「言わない。言うわけないじゃん。こつちも聞けないし。そんなこと」

松本「形も色もいろいろでな。色なんか昔は2

松本「ダメか」

松本「じゃあ。どうしてそう思った」

種類くらいしかなかったのに、今は50

葉「いや。違う。違うよ。天草はいいトコだよ。

松本「同じ屋根の下で暮らしてるんだよ。隠せる

0色以上あるらしい」

歴史と文化の薫る町だよ」

ことなんてそんなに多くない」

葉「増えすぎじゃない？ 多すぎじゃない？

松本「だよな。だよな」

ウインカー。

どういう進化っていうか、技術革新がある

葉「でもさあ。年頃の娘になにか買うならもつとあるじゃん。ココサとか行つてさあ。こ

は？」

んなわけわかんないもんじゃなくて」

松本「ホントに知らないのか」

松本「わけわかんない！」

松本「いやそんなわけないだろ。いやお母さん

葉「うん。知らない」

葉「あ。いや。その。違って。そういう意味じゃ

がそんな。いやそんなわけないだろ」

松本「なんだよ。同僚のみんなに、8年ぶりに

なくて」

葉「じゃあなんで離婚したの？」

会う思春期の娘になに買えばいいかつて

松本「葉。確かにおれはダメだ。クソだ。クズだ。

松本「そりゃあ。あれだよ。あれ。そう。肥後も

聞いたら全員これって言うつたのに」

そこまで言うな。ただな。おれのことば嫌

葉「どつちも頑固で意地っ張り。ごめんの3文

葉「そうなの？ てかよくそのピンポイント

いでも。ほてばきのことは」

葉「どつちも頑固で意地っ張り。ごめんの3文

な質問でみんなの答えそろつたね」

葉「お母さん。浮気してたよね」

字が言えない」

松本「ナウなヤングにバカウケだつて言うつて

松本「ああ。だからその。なんだ。浮気なんてデ

かいことじゃなくて。もつと。その。ちょ

つとしたことで離婚したんだよ」

栞「ちよつとしたことつてなに？」

松本「あー。あれだよ。あれ。あの。イビキがう

るさいとか。朝トイレで長い時間新聞読

むとか。抜いた鼻毛飛ばすとか」

栞「そんなことで」

松本「離婚すんだよ。そういうのが積もり積も

って別れんだよ。たいていの夫婦は」

栞「そういうことじゃなくてさ」

松本「お。動いた。あ。ほら栞。飛行機見えたぞ。

空港までもうすぐだ」

タクシー無線のノイズ。

松本「あー。こないだ。ウチに来たよ」

栞「え」

松本「ウチの営業所に来たんだよ。あいつ。あ

の。ペロがよ」

栞「テオ。そっか。パパ。松本さんどこ行ったん

だ」

松本「あいつはちゃんと知ってたよ」

栞「知ってた。なにを？」

松本「全部だよ。全部。全部だ。カナコが話して

くれたつて」

栞「そうなんだ。知ってるんだ」

松本「あいつ言つてたよ。カナコとシオリを絶

対守るつて。永遠に守るつて。言つてたよ。

何度も。何度も。何度も」

タクシー無線のノイズ。

栞「パパはラブで溢れてるからな」

松本「はん。なにがラブだ。家族つてのはもつ

とわけわかんねえヘンテコなもんで繋が

つてんだ。わかつてねえよペロは」

栞「テオ」

松本「お母さんは悪くないからな」

栞「そ」

松本「それに。あいつはいいヤツだ」

栞「うん。わかつてる」

松本「だから。栞は大丈夫だ。なにも心配しな

くていい。大事にされてる。大丈夫だ」

栞「そっか」

松本「おれが言うんだ。間違いない。大丈夫だ。

栞は。絶対に。大丈夫だ。絶対に」

タクシー無線のノイズ。

栞「松本さんに言われてもな」

松本「よし。着いた。栞。先行つていいぞ。荷

物。持つてつてやつから」

栞「さつきのキリン。なし」

松本「え？ きりん？」

栞「えーつと。き。切手」

松本「ん？」

栞「きつて。次。て」

松本「ああ。しりとり。て。て。手料理」

栞「り。えーつと。両手。て」

松本「またてかよ。て。て。あー。テオ」

栞「おー。覚えたね」

松本「なあ栞。飛行機の時間。大丈夫か？」

栞「おとうさん」

松本「おいおいおい待って待って待って。栞。」

栞。このゲームのルール。え。いま」

栞「行くね。これ。タクシー代。またね」

ドアの開閉音。

松本「タクシー代ってこれ。ほてじゃねーか」

ノック。

客「すみませーん。熊本駅までお願いします」

松本「え。あー。はい。どーぞー」

ドアの開閉音。

客「あ。運転手さん。それ」

松本「あ。ええ」

客「ばきほてのほて！ あ」

松本「お客さん。土佐の方ですか」

客「あ。いや。その。違います」

松本「これをばきほてと呼ぶのは土佐の方だ

けです。そしてそこにかつて血で血を洗

う歴史があつたことは当然ご存じですよ

ね」

客「あ。あ。あれ。ばきの方は」

松本「え。あー。そのー」

客「まさか失くしたんですか？ すぐに探さ

ないと。それは2つで1つ。組み合わせは

世界に1組しかない。お手伝いしますよ」

松本「大丈夫です。どこにあるかはわかってま

すから。車。出しますね」

客「はい。でも不思議ですよね。ばき。ほてばき

つて。結局なにに使うんでしょう」

松本「わかりません。でも。ただそこがあれば

それでいいんじゃないですかね」

客「そうですね」

松本「お客さん。今ばきほてって」

客「言ってます。言いません」

松本「そうですか。安全運転でいきますね」

〈おわり〉